



滄江

水心集



世為餘嗜者黨立門別而以芭蕉  
翁為軌則其亦多焉翁之在于世不  
好利名不求仕進晚退居深川之上  
專凝情於風月殊獲幽閑之趣矣其  
所從游者皆一時之英董象其教恢  
張其道微妙之旨固有不可語者自  
翁沒至今既百年矣翁之隨所好以  
聚訟於泉乎可通日以遠遜百有

人或拘執嶮怪奔走浮薄安在子能為  
翁之後哉余師柳居先生自孩髮信  
期道英華發出不為流俗擠居恆自  
以為吾已上為之堂未入為之室一朝發  
憤遠從勢如袁林子而學研精覃  
思茅月之久遂獲其真統之乃然  
先生於吟詠唯樂其興致已無意於不  
朽之故雖有佳句妙語不嘗留其稿也

先生之為風雅奇博是為近二三文人  
採摭遺句輯而梓之謀序於余余因  
次是言以徵先生之於俳諧不苟且之由  
云尔

大州漁人之書





柳居賛句集上

抱山宇門翠巖

松籟尾霜後校

春之部

筆旦

まゝのれやのあ〜ハきつふの入口  
か〜道せ〜あ〜お〜をひま

とや花の奥ゆ〜さ〜は川唇

岩とハ訓海の小ゆ〜さ〜り葉

双入連ハ下子とゆ〜ろ〜花の香

春れ来るさ〜とや梅と竹と草

わがしは神のあに祝ふ  
わがしは神のあに祝ふ

標 糸よ 棍の糸よ ねり糸よ 糸よ 糸よ

糸はむあり糸はむあり 西の巻糸  
糸はむあり糸はむあり 西の巻糸

よ 水や 松垣乃 姫よ 起り 糸

糸はむあり糸はむあり 西の巻糸  
糸はむあり糸はむあり 西の巻糸

念つともや 山丸の味は 是こそ 久

糸はむあり糸はむあり 西の巻糸  
糸はむあり糸はむあり 西の巻糸

美 糸や すほめく 這入 片折戸

蕙うともえく ち井の 齒乃 糸よ 糸

ほろた糸は 屋より あらく 花の 糸

糸はむあり糸はむあり 西の巻糸  
糸はむあり糸はむあり 西の巻糸

能 因の 山丸 夜も 糸よ 糸

糸はむあり糸はむあり 西の巻糸  
糸はむあり糸はむあり 西の巻糸

七 七の なり 糸よ 糸 福 喜 叶

糸はむあり糸はむあり 西の巻糸  
糸はむあり糸はむあり 西の巻糸

えりや 糸よ 糸 糸 糸 糸 糸

上

けちふ人まあまのしり  
えりやふらみのゆりしり初  
まわふ異る眼鏡や初こらみ

人の

南へ野を物減くすりまを  
月を冠まけ度くぬや舞の指  
七種や京の八百屋の急つる  
奇縁ふと折あは是せり舞ぬ  
梅まじりし手し初らよんまじり  
小京女のうけ下ゆりまのまじり

京へちりまも春まじりつるまじり

梅

正面まじりし野中のむらじり  
梅まじりや花枝のゆりまじり  
古ちや同女まじり梅まじり  
まじり梅まじり園の梅  
むらじり梅まじりやこまじり  
風流のまじり梅まじり  
那へまじり梅まじりやこまじり  
聖見まじりまじりやまじり



繁うれくまのいほふ入る柳うか  
ふすむすのまもさり柳了も  
の柳のまうまたく柳のま  
かふのまもふれく柳れ

五但ふ集の序

是、いつぬえお柳やま柳

家

りふ勢のくあくかやまくま  
楚まを成 懐く思やうすま  
ひうらううまう節のまのれ

勝日

千金を屏風も押やまら日  
むめまの志こむ勝日おれ  
勝ハ化粧もさーや月の影

性

啼くは花のちりこむ性おれ  
地まの鏡も心のうす了  
日よくくまのまぬ方の性お

白

志く集や少海志のまも終ま



ふくをれ廻しうは日おくを  
しう魚の終りわらや浪の巻

萩入

萩入や信田共共平一見先を  
やゆ入を新のむ歩み跡めりり  
萩入や古本の家屋忘れぬき

猫恋

閨の戸を尾もるもしくや猫の意  
四月しる常れおや福このむ  
都しうさふまかや猫の書

涅槃

涅槃をれ表もも柳さくふふふ  
るま光の記念あしう福んれ  
あはなほほまももや涅槃係

桂

くくけすも奥の桂流れも葉  
松葉く捨も市らう桂了節  
村の子はほくあすやあつるよ

初午

は川まや人と柳もあつるよ

上

初あしや切しぬ 涙治屋も乾 清  
く川もや片ありは 梅形をく  
卯むほや片ありは 茶屋を神  
あは川もや不のめく 福言れき  
は夫  
まつ年れははれや 牛のは前  
初まや海草焼き玉も 研く

紅梅

あ梅もまきく 梅くは 眞の  
紅梅やまきく 末指むい  
く梅や梅もまきく みて洗ひ

雪岩

ああつて野川を越へる ひと  
ま位はまきく ぬわ井も  
やを焼く息ひまきく ぬわ  
あまきく ぬわ

しき

世の中は梅福志ぬわ ち  
燕やるるよりあつて 破風  
葉の中は屋きく 園のまき  
追分く 連もまきく つま

題年記海流

蒸の面皮平ひりや子あま  
糸物此顔を見たり乙多の糸  
乙多此掉さす年記海流一哉  
伊予

成産野々実ひし山草々伊予哉  
いそちたを板の紙やをさす  
山花ひそれむささしはすれ  
花色の野花ひさりいし伊予哉  
山拂ふに常もくくくこと伊予哉

上巳

中略極見

乙川のや影意細もくくたえ  
野のるれ乾ぬいろや蓬もち  
羽子板もくふの絵本や籠さり  
碓氷満もゆいむふ乃あ  
糸籠や籠毛袖を引くうの糸  
糸さほしれささ下戸さ一板の花  
紫ささし仙女の顔やまの糸  
嘆さす暁さ道さ一板の糸  
宮方より手許ハま一籠の餅  
梳ささやくを依見と梳ささ

此の川に花を散らすはむしき  
翁の家を人々集むるはむしき  
信らむ世に生きたるはむしき

床一さみ歌よけりや能の家

花

山くみ垣無き人あさより  
散る梅の口もまぐささ  
是はまはるもいそがし  
切もいそがし  
花も持ぬ川も流るささ  
あやむる花さすの塔を  
あやむる

一しうらむのさすはくらうれ

この川西

母の草もうらむはむしき

市中央

山も花も引くや花の奥

この川

笑より面をを花の唇

題名

同篇は花の風やささの塔

この川

茶屋はあはれあやむしき

この川

一折れ花もさすや花の庭

この川

海へけり花もさすや花の庭

花日記

あつゝハ初冬ののび〜〜〜の毎  
の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜

あつゝハ初冬ののび〜〜〜の毎  
の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜  
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜

あつゝハ初冬ののび

十三日 花の香気は遠くまで届く

花の香りのほろほろと甘い

十四日 花の香りが風に乗る

花見のや蒲団の上を歩く 野

十五日 花の香りが遠くまで届く

くわんりり 木の山を花を

花見のやありては人のくも

花見のやありては人のくも

花見のやありては人のくも

かきかき

十六日 花の香りが遠くまで届く

花もその香りを一て花一本

花もその香りを一て花一本

花もその香りを一て花一本

花もその香りを一て花一本

風が花の香りを一て花一本

十七日 花の香りが遠くまで届く

花もその香りを一て花一本

花もその香りを一て花一本

花もその香りを一て花一本

上

下

孫博子ハ影の籠をくぬえんを  
十八日 晴

花より多く上り御座淋し 傀儡師

海より多く訪るふハ田舎人めやう

原より多く義の市を立たせんと

本のもとも義乃 玉音や茶のつと

十九日 新巻御座し 四月より晴  
ハリ 通より風あり

あつちよあつちよ強し 松のつと

たきふのそれはふらひされとを能く寺

のハチがさうりろくんとこに子や

いさちりれくおのくハおまを

海なるをと外薬よりくを

かふし結をく結と志り 紫のつと

少くち回くろよりあて花の本は皆よ

ふあこ一ゆくをきぢくむよ家村

あつちし秋風はあつち四才集はるは

目まきいへえいんを扱くふま

あつちむれき

山伏を花より 訓く 持はあ

系

晚鐘を餘りく通すや露の花  
ふき乃庭をささくやゆらぬ花  
あはしくも一まゝに——系の花

系不分

よ岬や土物の塚をささくはし  
出代やまゝり終りまゝまゝに  
雪の子まゝゆらおしやに中  
垢越の相まゝゆらやらの不  
葉の花を結糸と——ちりちり

たの草や中野——秋のつらみ  
雪を拾つとささく小能の南  
川上ハ現を流さ少あゆみ  
湖のうけやゆらぎの連るや  
ゆりま枝ほろろや月の下  
手のひらに氣はふら——雪  
少松とくおぼしきや柿の  
摘あつて葉の本を流す  
あぢのりさをむくまゝに  
ゆらぎとあ——田原のむら



うけろふの海ももゆきもて  
柳まふしーぬれさるる青い  
くもはるる春もあけぬ  
弱もや瓢箪のふら後り  
こぼるるや峰うらをさるる  
峰のまやあけぬ  
ぬくも心もさるる  
ぬくも手もさるる  
花子よ移るる乃秋も今の事  
糸巾のほも見ぬ

有城集よ入  
海棠や弱しつとすす  
山崎のちりさ見さるるの上  
卯枝やハま山吹ハ持り  
連翹やハるうけぬ  
菊苗やさるる  
口うりのり飾るるや柳  
りまハふれしれちり  
ゆきまきまのなり小田の  
りまやるるの手もほあ

夏之部

衣更

糸拵ふ八庭より掃れく ちく子  
夜花のぬも咲日やあらしめえ  
栄をささるる花をさやえ更  
のよほハ水室へ仕りお給うれ  
一ひり侍士も煤ちり下あらしめ  
末摘の穂も軽うや ぬのえ  
あまの向もほれしとけをえ更

郭

川原ハ晒のささやあもささ  
終の月のをうささ郭へ  
るささささささ神の命り合せ  
呵さささ井一ぬハ立をの  
おまのささ刺しありくやる記  
日よ唄一終古や言の杜さ  
子悦なくや博さのさの上  
ち拵くささささささささ  
ハ糸を九糸もあやほもささ  
さほもささ京の各や更とよす

二神名并陣の

上

上

病中一吟

一羽さくばつや田毎のふと〜とん  
る魂きく山彦の翁う〜う  
や北神よ通お〜くすむ杜宇  
咲みさる星のくや〜や可〜  
笠隠いぬい〜う〜 卯りや子規  
川越〜のほれ足は〜あ〜  
羽ひ〜う〜う〜てんせよ 郭〜  
ふ〜〜う〜茶〜道〜林〜山 藤 刀  
呵〜う〜宿 経の陰〜山 地 毛〜う〜

卯のむ

ふれむの輝きうてち〜や棒のき  
卯の光し〜う〜流 下 結のき 結 び  
う〜乃 紫 ぬ ち とも ぬ ち ぬ ち 一 片 け 片

落 佛

落 佛 や 霜 を も の し ま り 二 葉  
落 佛 や き ー ぬ ち ぬ ち 下 家  
落 佛 の 指 や 穂 も ん ち ぬ ち  
く っ ん 以 や ほ ー ち ち 指 の ぬ ち ー

病中一吟

百合

蝶の子乃きとくすすもあは  
さきれこいさるやなほつこの葉は  
ゆさうた結書くとそつと哉  
あふむしうは花えさくよあふ

閑台

鳩あも人きりうりか母こら  
こちう向うあつとさふんとり  
あつとさふりあふうんこら  
えられもしあふり花本よふ鳥

秀中

淋しきの極をハ戦しカむと  
志のこもやまの活くたぐふた

粉

ふくていふ顔しえゆや粉の舞  
粉の言は終を鳥其日おふれ  
さしあふ花集いり粉の舞

改筆

相のあふりあふしあをつあや  
あふりあふりあふりあふ

百合

上

時し笠おぬてしぬし—ふ合の足  
折て先底をのしとやゆりのを  
かふつと膝きすやゆら乃花  
秋待ぬ新し氣もふし—ふ合の草

昼歌

ゆらゆらやふるふ遊られてゆらゆら  
披つをせく扇は咲り竹の上  
音も新や布つづく白—さう家  
ひらけや若さふくく—ふ合の  
うらやふの笑みひらけや吹屋のか

牡丹

時くよ吾之くほへん了事  
日の初れ中よかやく牡丹は  
そふの屋本なくともふへん

蓮

さしとてあら—蓮や二り竹  
従の門こち—蓮く蓮えうか  
花も紫のふし—蓮のそり干  
さしとてあら—蓮のそり干  
蓮の香や吹屋吹く—松よく

上

江の橋うけ流しつり蓮の中  
川降る子はけりや蓮の巻

三

ふ素も切心伝ちし夢をさるうれ  
そえやふり火の氣は強まると  
ほら火やよも美やうぬ橋の衆  
玉川の名を憶てまゝ夢の系  
をよりハ強し夢の系も係

杜若

りふの節もよもむや杜若

ゆもくろも替へ強めみまはつと  
花物乃橋もうぬやうあつと  
池もも拭ひさそ、やかさばら  
杜若の性も老を帯せりり  
志し夢をえぬ流しや蓮子光  
は入る涙子の傳子やうたつと  
ふも眼を拭ひゆさやのよはさ

端午

地うし角もの、やうなる懐く角  
しふれりもえあゆりくの伝り

五日多を後ふや新のあやう料  
一も際ゆりもまゝ一ほのり  
懺えや深々陣屋もまぢり  
大佛の形も世并や阿やウ料  
はるれえ鞍馬一あやう費  
相も今も之を吸えやゆり  
まほもさしとてひやせあやウ料  
くくく鞍馬の山もくくく白  
ゆりも毎并や標結ひ  
のり見りみ出くよ

袖のきもあやうり物よあやウ料  
懺ゆりや柳もかさりその

五日多

まひもあは土のまみのおく  
五つとちや精やあはれうさち  
打るをゆきひますやさつとる  
義也ちのうけまや五つとる  
あうなるよの本も呆ーるー七日多  
はるれや月入りあよあ車  
五日多やえ捨るあはれうさち

昔は夕のうさしん〜や五ねる

むら〜さきを店み〜小豆講と  
しん〜のりし〜る〜ひて

小豆探るまや五日のなれ中

よみ叶

けり焼く信をえらや〜叶

よみ叶 ちやま 橋頭を〜信〜

あは中よ ね屋を〜信〜

田植

と、か〜羽をた〜て 田植〜

子乙女のク〜おん〜ゆり〜

糸行を〜ち〜ま〜り 子苗より

夏

教生の〜氣のな〜ん 夏も〜

ま〜れ 光〜か〜やく〜

一志〜り 帆〜く〜さ〜ひ〜れ〜

細涼

お母ち小世をの〜〜や涼〜

〜植〜叶〜ま〜り〜

ま〜小〜ま〜ま〜は〜多〜り〜や〜り〜

ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜



瓜の味

もろくハ素をえらばもすの味  
三日日取ニスよせしむの味  
都も似し山もろくハ瓜の味  
あはれくもすの味  
うらやまもすの味  
うらやまもすの味

味

陸の味もすの味  
枯木屋の世もすの味  
せいの味もすの味

瓜

瓜の味もすの味  
山もろくハ瓜の味  
とろろの味もすの味

味

瓜の味もすの味  
お付の味もすの味  
瓜の味もすの味  
瓜の味もすの味  
瓜の味もすの味

味

瓜の味もすの味  
瓜の味もすの味  
瓜の味もすの味

市一畑や糸もれるうゝ忍びは是  
一枚も切てぬやあまや芥子の葉  
念入くきをを埋むや五月を  
ま梅やむいとうや一糸を針穿  
扱のノ子も歌おの月北入より  
指を麻せん御蔭なれ花乃信  
干細ハるふのうとととととと  
糸おやら梅ととととととととと  
空陽花やあま娘ととととととと  
降陽の情してまはるや石橋築

夕うのや海もととととととと  
ゆふ歌と隣もたるとや歌を一とと  
若川やつとこと家なれ及越一  
さほ梅もあちとあはととととと  
む一とや裸と能をあひ一ととと  
あややととととのちととととと  
いやはととととととととととと  
さやちととととととととととと  
ゆふとととととととととととと  
ゆふとととととととととととと

接子や中子接子を抱はせ給  
松風まつれくさるや野牛  
ちんちんや蹄の徳を起河より  
ま回しせしけし事やむら  
川野やまふなる子遊志なく  
接子や中子接子を抱はせ給

秋之部

立秋

あつしの朝秋涼ぬりさ秋  
露の羽のて見えりけおの秋  
昨風の秋もひきりやきされ秋  
秋もささるつやハ雨屋のお場

七夕

夕合や月念忌しそい宵のわ  
不念やあふ入る只ちとほ  
吾をほろけ事しそいの川

以金物〜わ美〜とや舟の床  
多きをたはるもく〜引やと川の川  
引〜金や彩語〜川〜川〜川  
秋〜も〜は〜見〜り〜り〜のほ  
新〜ふ〜の〜川〜も〜あ〜や〜川  
多〜金〜れ〜の〜掃〜除〜や〜夕〜す  
と〜の〜川〜や〜尻〜舟〜舟〜舟〜舟  
牛〜も〜尾〜を〜〜〜〜〜とやあ〜を  
引〜金〜や〜日〜れ〜圓〜を〜〜〜  
先〜も〜〜〜〜〜〜〜〜〜上〜臨

舞

舞のふの花や折本共少新よ東  
以さうはれ花を〜とや〜り〜り  
上京ハ〜舞のふや〜本〜り  
あさうほの花を〜とや〜り〜り  
あさうほの花を〜とや〜り〜り

魂糸

照す〜と袖も〜とや〜り〜り  
玉粒を新とせ〜とや〜り〜り  
多〜と〜口〜浮世の〜各ハ〜り〜り  
多〜と〜口〜浮世の〜各ハ〜り〜り

三斜唐

上

三

新花

ちいさくやうを眺まを控くけ  
百りと眼くくあし新花  
新花や雪山をなれく系降

中

新花さくや折戸を客をくりけ  
雪ハ新花のしす新花や入り新  
折る人をもとく流花のくまか  
新花あやとよりと風のほくけ  
雪留のふり口をけ新花のつゆ

中

雪の降くくさむしうやきんくす  
むし新花や風新花のむし掛うりり  
るきのちりりさくくや日の新

新

新花後く雪よ雪のむし新花のれ  
吹くても雪をぬ雪よくくく新  
尾のむし新花もむしく新花のあ

新

新花のあ雪もむし新花のあ

鳥のさるさるみさるおさる引  
流さる海へ吸入るさるさる

鹿

峰の若味——尾ハ松は松  
窟らもア——若も那の綿  
其川の若もりも鹿——鹿の若  
啼若やせり——月夜ハ若也

月

名月や若も百あも奇かも  
あもや田中一の若もさる

湯田川

名月如りくさふや中も若  
移もも程テうりく月えこの南  
田中つけぬ若も若ふや若の月  
名月や若ハ二条よりさるを  
田中月をえ捨てつこさるさる  
若の若れおも若さる——さふの月  
眺る人よ若もけとや若れ月  
名月やとさるさるさるの若  
魚屋も若の戸中く日見れ  
名月や丸右けさるの若くやさく

八士花坊と  
月見

起視

信濃の夜や月を硯子物成ら  
十の松の柱や一糸ちりけ  
海山の影り小かきや之の如月  
可憐も露のささりや之の影

層

初夜や腹平物をくさねより  
まの原よ命の命を川ま水  
糸し穂よ折くさるや昔の影  
花石のまゝ圖すりや存の影  
まの影のまゝりや果まゝる如影

煥花三行  
あまのり

乾松硯

礎

糸もろよおや山もろれく影の影  
一初ていよれよと見えまのり  
初夜のつくや硯如石部より  
影もろい思しよあすよ山ね硯  
まもハのまやう務てまわすか  
あつた方ハおんまなまの硯よか  
紅よりハ骨折る屋のまのまか  
山の情も月ハ志まるとおわすか

草場

妻秋を枝み越くやうかの菊  
昔葉よし暮を吸ふてやうの庭  
耕化を伝ふくおふやうく畠  
折取の所直や葉お停伝お  
ゆ葉ふか葉のなや葉ふをけ  
白くおハ昔く菊の老ふくり  
おきくも葉の世伝やうの葉お  
菊の葉や掃除男の袖ふく  
さこの葉も葉もくやその竹  
葉の葉のくまたくや葉乃菊

後の月

水辺しそ子うみりほれ月  
梢ふ継のな葉や月乃思  
光もしく枯あや后のく  
粟の傳おしうくれと月入亦  
後くし粟名月やうりり葉  
中秋の月の桂川記より藤〜葉の枯れは  
くしゆの葉のくしゆを伝ふくは  
くしゆの葉のくしゆを伝ふくは  
くしゆの葉のくしゆを伝ふくは  
海くし伝りくありくお葉の月

紅葉



獨りけさうゆたたくしめみふれ  
川下もふこたのてんまのりるんか  
きんまる糸のちしやまこら精  
きんふとるしきてるるわさうも  
はるありすとらまころしあわふ

暮秋

けしやゆふすこる野梨園  
ゆく秋やとのゆきハ餌さし  
めりまきのゆきまそろしきむね

題不令

けしものころきく一糸う那  
きんもちをちするや一糸は  
ゆつやまれしたこぬんや  
いふ書や折くは落をきま  
けしや花をもちてんな  
きんやまのゆきも目かぬせ  
いよ入りまゆもあまふの  
めりめれしはまやしかり  
せの中なりしるすとくはり  
きんまや葉しきさらつは

中一ろー白一燈のくろくを  
哪くもの物もしたく本権の  
ハ翔や葉ふ子うむり破てあ  
系序ハ下手の建く影心  
思おーく昼いさくちと  
浪亦れ廻むぬりま  
三娘をいくもし  
一さばく後世ハきー  
鳩鳩のさけと  
のくーのきりぬや  
のろ

初一もや貝のつら  
る月ウヤ無手ふ  
抄草やと  
まを  
ふ科の  
まの  
おゆ  
秋海棠  
ささ  
さ

上

三十一

鉢栗の城もさるる東山おろし  
月おめハ名もかろやろや辻角力  
山畑を弄しつゝもむやみ給とり  
新とともや治ハ那と申山とをり  
沸しその味やろみかろす瓜  
小もやろと吸葉ハ志と那と菊ハ水  
つゝあんと那のさうや冷の掬  
とちかきれろみ海す存と来れ  
信吉の外もろり今少おはるる角  
筋穂ととれよろろのさ

金中  
く結を細り結すや縁 在り  
いふ書の間扇入るや辻角力  
扇金とあつとほろと葉の家  
け新をえ送る縁や小田の房

舟之部

四画

白の糸を常盤のまやあーく  
りやの織つははらてやうり  
一可るまや小ま如き細子  
之上うくむひろあやーくれ  
ふを居るまき思うくねん  
彩と少まきねんーとれ可那  
うーまきお金ーするひるうふ  
はーふまきねんーとれ可那

舟之部

白の糸を常盤のまやあーく  
りやの織つははらてやうり  
一可るまや小ま如き細子  
之上うくむひろあやーくれ  
ふを居るまき思うくねん  
彩と少まきねんーとれ可那  
うーまきお金ーするひるうふ  
はーふまきねんーとれ可那

雪

初まや枝のく角を隠はほと  
はつーりとのの匠者やまの  
勢如く舞しりりまらとのま

田舎ワ  
何ふ  
申  
ふ

あゝ味一琴より蓋し一雪の松  
く川よりや川田の株の目も川はく

ふき

あゝやあゝな屏風より雪の  
水もれ花もとけし雪乃影  
おきよ先知くもや庭うま

千鳥

あゝくも旭りしはちりあ  
事くくくくくくくくくく  
あゝはのあゝくくくくくく

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

水

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
牛の角あゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

氷

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

念佛

月の入るかぐく〜〜〜とてあふ佛  
野川より流るのぬきやふとあは  
取越〜〜〜世の言わらふ念佛

茶 暮

花きの果や枝もあひり〜  
節季の流しとくや境を  
りさくらやメツれ縁もくは  
粟ほく〜〜佛の流るは

画工何〜〜〜は、木の二軸をり〜〜とて、  
先は、流るは、流るは、流るは、流るは、  
そ〜〜とて、流るは、流るは、流るは、  
流るは、流るは、流るは、流るは、  
流るは、流るは、流るは、流るは、

〜〜〜は、流るは、流るは、流るは、

粟の粟は、今や流るは

流るは、流るは、流るは、流るは、  
流るは、流るは、流るは、流るは、  
流るは、流るは、流るは、流るは、  
流るは、流るは、流るは、流るは、

七化の良富や尾の〜〜とて

耕す〜〜とて、流るは、流るは、  
流るは、流るは、流るは、流るは、

こ袋 賣の路を〜〜とて

流るは、流るは、流るは、流るは、  
流るは、流るは、流るは、流るは、

ふきの粒魚や鰯も解もり  
唐子作り〜〜とて

上

酒餅の組類

おひかりのこころをのく  
おろ下とハツコ  
おろ下たのオレウ  
おろ下り

珠の記ひも去る  
けりともねれと

世の中は酒乃美是や餅の音  
懐もり小掃て昔少事厨と結  
吾も者何よりりや——  
桶穿少て月を君とんと——の事  
二探之けりを楫のさすもや愛ふ  
言れ物ふ本も何りとも——の事  
ふ多す小糸金さやもや——  
是夫の影も師走乃月おう菊

匠をささるは都  
のゆきをえりて

釣きとこ世帯を架すけひ  
おらもやさすけり——の極  
みよし餅や梅の影も手あ想  
圓扇より又花やさ——  
きれとま餅やゆきの——  
耳洗ふ餅美——懐乃音  
もち花や——も梅の影やさよ  
手の影も餅を踏むおあさよ  
けり——のねりも売を——  
御色取を理う通るや秋賣

毎つとや和歌のそ練是ハ志ハ福も  
 毛ちの白しき手掛ふやアサ田のわ  
 糸ののねを踏なす一季作  
 都よりゆり路地へハ京はの糸や衣をり

念不分

糸を他ふへたんとく十ねん  
 志の十ねもひねりへくす糸  
 野ね皆心ものりー神のまを  
 妹されくくるし欠こや神のまを  
 心や世を意細きせいへくを

何佛刻もあらんきまより糸  
 玉照の逢魔忌そーー松の風  
 逢魔忌やそ声のぬおも枝へ付  
 意よりやや野ちれ詩を体よせ流  
 意ねや穴ハ地眼の福をー  
 如く物と猫もえくたろ海糸か  
 子産をけくく立てや大根曳  
 杉苗の夕日もくたす枯神武  
 五不れお作をさくらみ糸ぬん  
 いろくくの瓢の糸や針くき



飯舟の七人あやや竹乃鼻  
喧そつや者く時くはに豚汁  
されとつれあつろもむとく大やん  
背く縁ハ之ぬ志長の湯穿れ  
紫の花やさふも今ハ際る時  
その花ハ布子まきー彌代さ  
浅く月のうちもく着る余うあ  
雙ふやか茂つ時めく肩車  
埋ふやまより展る籠つてのま  
言を付やふや蕙の枯のふり

亭さくしぬ増しそ又る巨燈うさ  
花くのきわしーさやちふま立  
好ひ人の置けくま豆焼く風  
山彦枝や家く作つる許ひと川  
細竹守おの目や何つくおら山  
廻極く蕙并頂の非樂くやふ  
嵐の愛の顔ハ見さーふたすし乳  
がつかや屋あふーさおのさか  
一里ハいもとささとやあーら守  
己うふもとささめせくや枕托の香

る帝や林し〜とゆ〜と花  
卯齋や時を〜月四つを〜と  
は〜〜〜本の家を〜の〜と〜と  
咲家一の店を〜祝や作 齋



